

国語

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

1 前文

令和8年度「共通テスト」の『国語』の問題作成方針を踏まえ、高等学校『国語』教科担当としての立場から本年度の試験問題を検討した。なお、評価に当たっては、報告書（本試験）15ページに記載の8項目の観点により、総合的に検討を行った。

2 内容・範囲

第1問 「データ・リヴァイアサン」という言葉をキーワードにしながら、集団の利益となるようにデータを蓄積し続けるシステムに組み込まれた現代人のありようについて論じた論理的な文章である。後半の抽象度が非常に高く、「データ・リヴァイアサン」や「存在論的機械」という言葉の意味するところも読み取りづらいため、文章の内容を的確に読み取る力や思考力を確認する上では、やや課題のある素材文及び問題であった。

問1 漢字・熟語についての基本的な知識・技能を問う適切な問題であった。

問2 群れがもたらす情報とデータこそが「真の存在価値」であると筆者が述べる理由を読み取る力を問うている。論理展開を踏まえて筆者の表現意図を考えさせるという出題意図がやや分かりにくい問題であった。

問3 現代人と寓話におけるミツバチやアリとが重なり合う部分について、その内容を的確に読み取る力を問う適切な問題であった。

問4 筆者が「分身のメタファー」を用いて提示しようとしている内容を的確に読み取る力を問う適切な問題であった。

問5 本文における表現上の特色や効果等について、的確に理解する力を問うている。正答が選びにくく、識別力にもやや課題が残る問題だった。

問6 (i) 【資料】に述べられている「人工知能」について、的確に読み取る力を問う適切な問題であった。

(ii) 本文全体の趣旨を【資料】の内容を踏まえて的確に読み取る力を問う適切な問題であった。

第2問 貧窮した都会生活を送る「お絹」のもとへ弟が上京して来る場面を、「お絹」の心情描写を中心に描いた文学的な文章である。弟を迎え入れることに対する困惑と、弟への揺るがない愛情という、「お絹」の相反する心情を簡潔な文体で描いており、出来事や場面の叙述をもとにした登場人物の心情を捉える力を問うことができる素材文及び問題であった。「注」に頼り過ぎずに本文を理解できるような素材文の選定や、各小問に取り組むごとに本文の理解が深まるような設問の構成が次年度への課題である。

問1 本文の読解に必要な語句の意味についての基本的な知識・技能を問うている。語彙に関する出題は歓迎されるが、選択肢の言葉の難易度が高かったことは課題である。

問2 弟の手紙を読むことにおける「お絹」の心情を、傍線部の前後から的確に読み取る力を問う適切な問題であった。

問3 「おえい」の発言に対する「お絹」の心情を、傍線部の前後から的確に読み取る力を問

うている。大問のリード文等において、解答に必要となる「お絹」と「おえい」の人間関係が十分に説明されていなかったことは課題である。

問4 比喩で表現されている内容について、傍線部より後の記述からの確に読み取る力を問う適切な問題であった。

問5 弟と再会する前後の、弟に対する「お絹」の認識について、傍線部の前後からの確に読み取る力を問う適切な問題であった。

問6 周囲の人の評価にさらされた弟と、そのような弟をかばうようにする「お絹」の心情について、傍線部の前後からの確に読み取る力を問うている。傍線部の位置や設問リード文の精査については、やや課題が残る問題であった。

問7 本文における表現上の特徴を的確に捉える力を問う適切な問題であった。

第3問 国語科における「書くこと」の言語活動を想定した問題である。様々な形式からなる資料を読み、情報の妥当性を吟味する力、書こうとする文章の内容や論理の展開を検討する力等を測る意図が見られ、学習指導要領の「書くこと」の学習過程に即した素材文及び問題であった。集めた資料をもとにレポートを書く際の思考の過程が追体験できる場面の設定は評価できるが、受験者も作問者が設定した思考の過程を追い続けなければならないため、解答するまでの作業が複雑化する面があったように思われる。受験者の解答時間に配慮した問題設計が、今後の課題である。

問1 【資料Ⅰ】～【資料Ⅲ】から得られるそれぞれの情報を的確に読み取る力を問う適切な問題であった。

問2 レポートのテーマに沿って、【資料Ⅰ】～【資料Ⅲ】から得られるそれぞれの情報を相互に関連付けながら精査する力を問う適切な問題であった。

問3 【資料Ⅳ】の情報の妥当性を【資料Ⅰ】～【資料Ⅲ】と関連付けながら吟味・精査する力を問う適切な問題であった。

問4 レポート執筆に向け、集めた資料を踏まえて現状を整理し、今後の方針を検討する力を問うている。二つの正答選択肢のそれぞれには正答性があるものの、全体として一貫性のある自然なメモとなるよう工夫する必要がある。

第4問 室町時代の歌人である正徹の歌論が書かれた『正徹物語』からの出題である。初心者に向けて歌の詠み方を指南する内容のA～Cの文章で構成された本文は、リード文や「注」を参考にして古文を的確に読み取る力を、また、本文に関連する【資料】は、和歌の内容を的確に読み取ったり、それを踏まえて本文の解釈を深めたりする力を確認する上で適切な素材文であったが、本文についてはやや平易であった。設問は、学習指導要領に沿って言語活動を重視した学習場面が設定されており、示唆に富むものであった。

問1 本文の読解に必要な文語のきまりや語句の知識を問う適切な問題であった。

問2 正徹が考える、初心者が歌を詠む際の心得に関して、文章A・Bの内容を的確に読み取る力を問う適切な問題であった。

問3 了俊が正徹に語った内容に関して、文章Cの内容を的確に読み取る力を問う適切な問題であった。

問4 (i) 本歌取りについて、文章Aの内容を解釈する力と、その解釈と【資料】とを関連付けて分析する力を問う良問であった。

(ii) 【資料】にあるⅠ～Ⅲの和歌について分析する力を問う適切な問題であった。

第5問 『論語』にある言葉について、【文章Ⅰ】では朱熹の『論語惑問』に書かれた蘇軾の見解、【文章Ⅱ】では王夫之の『船山遺書』に書かれた王自身の見解がそれぞれ示されている。両者

の見解について、漢文に用いられる基本的な知識や句法をもとにした的確に読み取る力を確認する上で適切な素材文であった。各設問も素材文に沿って適切に設けられており、バランスのとれた出題であったが、今後は、学習の過程を重視しつつ、複数の素材文の関連性を生かした設問構成となるような工夫にも期待したい。

問1 漢文特有の語句についての基本的な知識を問う適切な問題であった。

問2 本文の文脈に即して語句の意味を問う適切な問題であった。

問3 本文の文脈を踏まえ、「而」の用法を的確に判断する力を問う適切な問題であった。

問4 【文章Ⅰ】の要旨を的確に読み取る力を問う適切な問題であった。

問5 傍線部前後の文脈から、「気質」に関する筆者の主張を的確に読み取る力を問う適切な問題であった。

問6 本文を的確に理解するために必要な訓読のきまりや書き下し文の基本的な知識・技能を、文脈を踏まえて活用する力を問う適切な問題であった。

問7 蘇軾と王夫之の見解に関して、【文章Ⅰ】・【文章Ⅱ】の内容を的確に読み取る力を問う適切な問題であった。

3 分量・程度

各大問とも設問数は適切。分量や難易度についても大問間で調整されており、『国語』全体としてはおおむね適切であった。

第1問 分量、設問数は適切。論旨が分かりにくい本文後半の内容を問う問4、正答が選びにくい問5は、受験者にとって難易度が高かったのではないと思われる。

第2問 設問数は適切。本文や各設問の分量は適切だが、「注」が多かったことは課題。素材文自体の難易度が高いため受験者にとって解きにくい設問が多かったと思われるが、『国語』全体のバランスを考慮するとおおむね適切な難易度であった。ただし、問1（ア）で、受験者になじみのない語が選択肢の中に含まれていたことは課題。

第3問 設問数は適切だが、資料の分量がやや多かった。また、解答するまでの作業が複雑である一方、資料を読み込まなくても正答が推測できる設問もあり、難易度の面で課題があった。

第4問 分量、設問数は適切。本文はやさしめだが、【資料】と問4の設定により全体の難易度は調整されていた。

第5問 設問数、分量は適切。難易度はやや低いが、『国語』全体のバランスを考慮すると適切であった。

4 表現・形式

第1問 文章表現、設問形式、配点についてはおおむね適切であった。

〔問2〕「真の存在価値だろう」と筆者が述べた理由について、本文の叙述をもとに捉えることができるかを問う問題である。問題作成方針が重視する、文章の内容を多面的・多角的な視点から解釈する力を問う意図は感じられるものの、設問リード文からは解答すべき内容が想像しにくかったと思われるため、適切に出題意図を把握することができるような問ひ方の工夫が必要であった。

第2問 文章表現、設問形式、配点についてはおおむね適切であった。

〔問7〕本文から引用された複数の箇所について、文学的な文章の表現上の特徴という観点から思考させる適切な問題であった。その一方で、出題の形式については、学習の過程を重視し、問題の構成や場面設定等を工夫するという、問題作成方針が重視する点において改善

の余地もあった。

第3問 文章表現や用語，図表，配点はおおむね適切だった。一方，設問形式については，解答するまでの作業が複雑化する面があった。

〔問2〕レポートを書くために自分が関心を持った事柄に関するテーマを設定し，実社会の中から非連続型テキストも含めた資料を複数集め，その情報の妥当性を吟味するという「書くこと」の学習の過程を重視した学習場面が設定されており，問題作成方針に合致している。

本問では午前中の調子を左右する要因について結論づけるにあたり，【資料Ⅰ】～【資料Ⅲ】を組み合わせる根拠とする妥当性を分析・判断する力を問うており，受験者の日頃の学習活動を踏まえている点で良問であった。また，この問いに続く設問構成についても，「書くこと」の指導事項につながる出題の工夫が見られた。

第4問 文章表現や用語，設問形式，配点については適切だった。

〔問4〕我が国の言語文化に特徴的な表現の技法である本歌取りを題材に，具体的な言語活動の場面を想定した設問であり，問題作成方針に合致している。(i)では，本歌取りして詠まれた和歌について，文章Aの解釈をもとに分析する場面，(ii)では和歌の比較を通して，本歌取りを行った詠み手の意図を読み取る場面を想定している。題材の意義や特質を生かした出題で，内容を多面的・多角的な視点から解釈する力を測ることができる良問であるとともに，高等学校における授業改善に向けて示唆に富むものであった。

第5問 文章表現や用語，設問形式，配点についてはおおむね適切だった。

〔問7〕『論語』の一節に対する蘇軾・王夫之のそれぞれの見解を比較し，解釈の違いを読み取る力を問う意図が見られる問題である。二つの文章を関連付けて深く思考させる問いに昇華させるためにも，今後は，問題作成方針の重視する，言葉による記録や説明，話し合い等の言語活動を重視した形式も含めて検討いただきたい。

5 まとめ（総括的な評価）

「新教育課程」を踏まえて，昨年に引き続き実用的な文章や図表を資料とした設問を含む五つの大問で構成される試験であった。知識の理解の質を問う問題や，思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる問題を重視する問題作成方針に則した問題が，生徒の学習の過程を意識した場面設定も行われながら出題されたことを評価する。実社会における国語による諸活動に必要な資質・能力の育成を目標とする「現代の国語」と，我が国の言語文化への理解を深めることを目標とする「言語文化」の二つの共通必修科目を通して身に付けた力を評価するのにおおむね適当なものであった。本テストが，今後より一層，高等学校での学習を通して受験者が身に付けた力を評価するのに適当なものとして作成され，また，高等学校国語科の授業づくりに資することを期待して，意見・要望を以下に示す。

- (1) 学習指導要領に沿った問題作成がなされていた。第3問におけるレポートを執筆するために，設定したテーマに関して集めた複数の資料を分析・吟味し，レポートの根拠として資料の妥当性を批判的に検討するという「書くこと」の学習過程の序盤にあたる場面の設定，第4問における古文の内容に関する具体的な例を知るために，教師が用意した【資料】をもとに考えを【ノート】にまとめる場面の設定など，生徒による「主体的・対話的で深い学び」を踏まえた設定のもと工夫された形式で出題されており，平素の学習活動を通して身に付けた力を評価できるものとなっている。
- (2) いずれの大問においてもおおむね難易度に応じた分量となっており，時間内でテキストの細部を検討したり全体の要旨を把握したりして読み，設問の意図を捉えて選択肢を吟味することがあ

る程度可能であったと思われる。第4問における【資料】と【ノート】は、分量もそれほど多くはなく、本歌取りについて述べられていた本文の深い理解を促す良質なものであった。一方で、第1問の本文については、特に後半の難易度が高く、問6で【資料】は付しているものの、「データ・リヴァイアサン」についての筆者の課題意識が読み取りづらかったため、受験者にとってより明確になるよう、素材文の示し方や設問の配置について留意することが必要であろう。また、全体を通して選択肢の内容が連想しにくい書きぶりとなっている設問リード文が複数見られたため、問い方については引き続き検討いただきたい。今後も受験者が設問に対して十分に思考し、判断することを通して、本文の理解を深めることができるための時間が確保されることに期待する。

- (3) 本テストは、「言葉による見方・考え方」を働かせ、「言語活動」を通して、生徒の総合的な言語能力を育成するという学習指導要領の趣旨が踏まえられたものであった。第3問における「書くこと」の学習過程の序盤に起こりがちな状況を想定した場面の設定、第4問における本歌取りの具体例を示し本文の理解を深める場面の設定などは、授業改善の視点において大いに示唆に富むものであった。一方で、第2問における各小問の関連性、第3問における設問を解くにあたって用いる必然性のある資料の設定などには一定の課題が見られたため、素材と各設問が有機的につながりながら深い理解を促すような大問構成の工夫を求めたい。
- (4) 近代以降の文章、古典とも、高校生が読むのに相応しい多様な素材が用いられている。特に、第5問は、本文自体は読みやすいものの、内容の理解のためには深い思考力を要する素材であり、「言語文化」において他の作品などとの関係を踏まえて解釈を深める指導の充実に資するものとして大いに評価できる。一方で、第3問においては、「書くこと」の学習場面の設定は良いものの、読み込まなくても正答が推測できるような側面をもつ資料もあったため、深い理解が必要となるような素材の検討が求められよう。出題にあたっては、素材の魅力や価値を十分に生かし、受験者が文章や資料から得た情報を多面的・多角的な視点から解釈する力を発揮することのできる設問が、全ての大問においてバランス良く出題されるよう工夫していただきたい。共通テストにおける出題が高等学校国語科における授業改善を促し、実社会における国語による諸活動に必要な資質・能力を生徒に育成することに資するものとなるよう期待する。